

幼稚園教諭志望学生の被援助志向性への介入の試み ー附属幼稚園におけるおはなし会の実践とフィードバックの効果ー

本田真大 (北海道教育大学)

【問題と目的】

学校教員の精神障害等による離職の予防や学校内外との連携・協働による教育実践の質の向上のために被援助志向性の促進が重要であり(田村・石隈, 2006), 教員養成においても求められよう。実際に教員養成における被援助志向性やチーム援助志向性を高めるための実践研究は既にいくつか報告されているものの(本田, 2012; 田村, 2012), 更なる知見の蓄積が必要であろう。

そこで本研究では幼稚園教諭を志望する大学生を対象とし, 幼稚園教諭としての被援助志向性を促進するための教育プログラムの効果を検証する。

【方法】

対象者: A 大学における「幼児の言葉」の授業を X 年度に履修し, 調査に同意が得られた大学生 16 名(男性 2 名, 女性 14 名, 平均年齢 20.00 歳)。
プログラムの構成: 第 1 フェイズ(#1~#10)は大学でのおはなし会の準備と予行練習, 第 2 フェイズ(#11~#12)は附属幼稚園におけるおはなし会の実施と幼稚園教諭からのフィードバック, 第 3 フェイズ(#13~#15)は大学でのおはなし会実践時のビデオを用いたフィードバックであった。

質問紙の構成: 第 1 フェイズ冒頭, 第 2 フェイズ

後, 第 3 フェイズ後の 3 時点において, (1) 幼稚園教員養成スタンダード(別惣他, 2011)のうち 3 つの下位尺度 (Table1), (2) 保育者効力感(三木・桜井, 1998), (3) 特性被援助志向性(田村・石隈, 2006)が, すべて 5 件法で尋ねられた。

【結果と考察】

3 時点のデータが揃っていた 12 名のデータを分析に用いて, 時期を要因とする被験者内分散分析を行った。分析の結果, 「保育内容の展開力」と「保育評価・改善力」は幼稚園でのおはなし会の実践とフィードバック後に上昇し, 幼児を対象とした実践経験が影響したと考えられる。また, 「幼児理解力」と「保育者効力感」はビデオフィードバック後に上昇し, 自らの実践を客観的に振り返ることで高まったと考えられる。これらの結果から, 幼稚園教諭としての資質・能力の側面ごとに適した教育プログラムが明らかになったと言える。

被援助志向性に有意な変化がなかったことには, 介入前の時点での得点の偏りの大きさの影響と, 教育プログラムが有効ではなかった可能性が考えられる。今後は被援助志向性の促進要因を介入プログラムに含めた効果の検証が課題である。

Table1 幼稚園における「おはなし会」の実践の効果 (N=12)

		Time1	Time2	Time3	F値	partial η^2
幼稚園教員養成スタンダード						
幼児理解力	M	3.32	3.55	3.75	8.00 **	.42
	SD	.51	.47	.43	Time1<Time3	
保育内容の展開力	M	3.00	3.50	3.64	12.47 **	.53
	SD	.71	.55	.72	Time1<Time2, Time3	
保育評価・改善力	M	2.91	3.85	3.83	16.52 **	.60
	SD	.83	.47	.40	Time1<Time2, Time3	
保育者効力感	M	3.05	3.32	3.54	5.81 *	.35
	SD	.34	.55	.46	Time1, Time2<Time3	
被援助志向性						
被援助に対する肯定的態度	M	4.10	4.35	4.28	1.15	.09
	SD	.95	.52	.66		
被援助に対する懸念や抵抗感	M	2.02	1.98	1.96	.08	.01
	SD	.66	.68	.77		

** $p<.01$, * $p<.05$.